

お師匠さんのこと

1964 年卒 窪田 昌三

1960 年 4 月、一人の「少年」が志望した同志社に入学、航空部の門を叩いた。少年は初めてグライダーというものに触れ、そして生涯の師となる人に出会った。航空部とグライダー、そして「その人」に鍛えられた四年間で、少年は部員を率いて一人で合宿を指導する「大人」に成長していた。

私が牧野教官から受けた指導、教育の中でグライダーの操縦は、そのごく一部分に過ぎない。それは的確な言葉や動作で指導された。しかし、それよりもっと多くの大事なことをその背中で教えられ、行動や生き方から学んだ。先輩から後輩へと繋いでゆく大学の部活動で大切に守らなければならない普遍的な価値観を学び、それはそのまま男が生きてゆく上で欠くべからざるものの見方、考え方、行動指針になるものとして私の意識の根底にしっかりと植付けられた。大学の四年間、正に自立前の大切な時期に、生涯の「師匠」と仰げる人に出会えたことは幸せなことである。

部創立 50 周年を機に、それまで全体的な組織化が出来ていなかった OB 会を牧野鐵五郎・佐々木哲の両先輩が機関車の如く幹事会と若手 OB を牽引し、完璧に纏め上げ、強力な現役バックアップ体制を完成させたのが現在の翔友会である。以来、お二人は翔友会の重鎮として活動を指導して頂き、その時生まれたものの一つが本誌「翔友」である。部の活動や OB 会の状況を正確な記録として後世に伝えてゆく。これも牧野先輩が残された「遺産」の一つである。

牧野先輩は気遣いの人であった。どのような場面でも他者への気配り・心遣いが行き届いていた。

それも、された方が気付かないほどさり気無くである。特に叱責された後のフォローには、受けた本人が感激するほどであったと聞いた。(幸い私は一度も叱られたことは無かった)。

牧野先輩は記憶力に優れた人であった。年に二回、初夏と晩秋の頃にお宅を訪ね、老境に入った子弟が昔の思い出話にひと時を過ごすことが永年の楽しみであったが、そんな時、90 歳を超えて尚、その記憶力は衰えを知らず、私が忘失している部分を補って余りあった。80 歳にして始められたパソコンで、操作に困った時のご質問も基礎的な即答出来るものから、その内段々と高度な内容となつて、「調べて後ほど回答します」ということが多くなった。そのご努力が結実したのが、5 冊の玉著である。パソコンを駆使して豊富な写真と貴重な資料、上手なイラストを配した見事な出来栄であると共に、ここでもその確かな記憶力が読み応えのある内容になっている。

グライダー一筋に歩まれ、特に戦後学連再発足にご尽力以来、学生の指導には持てる情熱の全てを注がれた。物欲や金銭に拘泥せず、自ら思うところを真直ぐに生きるピンと伸びた背筋、決してぶれない生き方をしつつ他者への思いやりを忘れない姿勢、これらを無意識のうちに体現された生活態度こそ、牧野先輩の Dandyism であったと思う。お師匠さんをお手本にし、その背中を追いかけてきた私は、一歩でも近づけたのだろうか？

2016 年 5 月 23 日永眠。享年 95 歳。天寿を全うされてのお別れだったので、悲しくは無かった。唯々寂しかった。